

平成30年度 国立江田島青少年交流の家教育事業
自然体験活動指導者（NEALリーダー）養成事業実施報告書

【趣 旨】 全国体験活動指導者認定委員会が制定した「自然体験活動指導者養成カリキュラム」に則り、青少年向け自然体験活動プログラムにおいて、子供の発達段階に応じて適切かつ安全に指導ができる自然体験指導者（NEAL）リーダーを養成する。

【主 催】 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立江田島青少年交流の家

【期 日】 平成30年9月15日（土）～9月17日（月・祝） 2泊3日

【会 場】 国立江田島青少年交流の家

【対 象】 自然体験活動に興味のある方、自然体験活動指導者になりたい方（18歳以上）

【参加者数】 55人

【講 師】

河野 宏樹 （環境教育事務所 Leaf 代表）

西原 直久 （大柿自然環境体験学習交流館“さとうみ科学館”館長）

堀江 清二 （まなび工房代表、広島経済大学非常勤講師）

山本 晴代 （大塚製菓 OS-1 事業部 営業部 広島支店 栄養情報担当者）

江田島消防署救命救急士

森下 泰至 （国立江田島青少年交流の家 主任企画指導専門職）

※ 主任講師 国立江田島青少年交流の家 望月 奏

【企画・運営のポイント】

- (1) 専門知識に基づいた深い内容の講座とするため、「青少年教育における体験活動」、「対象者理解」、「自然体験活動の指導」、「自然体験活動の特質」では地元で活躍する指導者を招いた。
- (2) 「自然体験活動の技術」では大柿自然環境体験学習交流館（さとうみ科学館）の協力を得る形で、実際に海辺の生物を触りながらの演習が行えるようにした。
- (3) 第3回ボランティア養成セミナーと共同で開催することとした。
- (4) 実際の指導では、より多く遭遇するケースが考えられるため、熱中症対策の講座を開設した。

【活動の実際】

(1) 日程・内容

【1日目：9月15日（土）】

9：15～ 受付

9：45～10：00 開講式

10：00～11：00 ガイダンス「自然体験活動指導者認定制度の説明」（主任講師）

11：15～12：15 青少年教育施設の現状と運営（施設職員）

13：15～14：45 講義①「青少年教育における体験活動」（河野）

15：00～16：30 講義②「対象者理解」（河野）

18：30～20：00 講義・実技③「自然体験活動の指導」（堀江）

20：15～21：45 情報交換会

【2日目：9月16日（日）】

- 9：00～12：00 講義・演習④「自然体験活動の特質」（堀江）
13：00～16：00 講義・実技⑤「自然体験活動の技術①」（海辺の自然観察）（西原）
16：45～17：15 ボランティア活動の意義（施設職員）
17：15～20：15 講義・実技⑥「自然体験活動の技術②」（野外炊事）（森下）

【3日目：9月17日（祝・月）】

- 8：50～ 9：10 講義⑦「熱中症の危険，予防」（大塚製菓）
9：15～12：15 講義・演習⑧「自然体験活動の安全管理」（江田島消防署救命救急士）
13：10～13：20 講習のまとめ（主任講師）
13：25～13：55 認定試験（主任講師）
14：00～14：10 閉講式
14：15～15：15 ボランティア活動の意義（施設職員）
15：20～17：20 青少年教育施設におけるボランティア活動（施設職員）



【成果と普及】

- 募集30名，参加者55名。広島県内の大学生のみならず，県外の高等専門学校生の参加もあった。
- アンケートの満足度は100%であった。（4段階評価で「4」，「3」と答えた受講者の割合）
- 参加者全員が認定試験に合格し，55名の自然体験指導者（NEAL）リーダーの養成を行った。
- 事業後の教育事業で法人ボランティアとして活躍した受講生もいる。
- ムードメイクをしてくれる学生もおり，活発に意見が出る講座となった。指導者自身もエネルギーに楽しんで臨んだこともあり，受講生との間の雰囲気は親密なものとなった。「共に学ぶ姿勢」から気

付かされたことも多くあった。

- 野外炊事ではどのグループも素晴らしいチームワークを見せることができた。望ましいコミュニケーションを図る中で協力して作業することにより、手際よく準備や後片付けができ、学びや関係も深まる有意義な時間となった。



【今後の課題】

- 本事業は第3回体験活動ボランティア養成セミナーと合同で開催している。本年度は、豪雨災害や第1回ボランティア養成セミナーを主な対象者である大学生が忙しい時期に組み込んだことにより、指導者養成系の事業が相次いで中止となったため、参加者が集中した形となった。今一度、これらの事業の日程や位置づけを考え直し、来年度以降の体制においても効果が上がるような形を考えていく必要がある。職員研修とも絡めて計画を練るのも一つの手である。
- 潮の干満の関係で今回も海岸へ観察に行くことができなかつたため、代わりとして研修室内でカブトガニ等の海辺の生物を直接接触することができたことは好評であった。一方で残念がる声もあったことから、潮の干満のことも考慮に入れて日程を組んでいく必要がある。
- 受講後の関係も大切にしていきたい。ボランティアを募集している事業や一緒に活動できる機会を紹介し、今回指導に携わった者だけでなく、全職員が仲間意識をもって関わっていく、といった空気を作っていきたい。また、本事業は最初のステップであるが、これを足掛かりとして順次、ステップアップしていけるようなシステムづくりや紹介をしていくことも大切である。
- 事業を実施するためには、全国体験活動指導者認定委員会が認めている講師の確保が必要になるため、主任講師と担当専門職が早い段階から連携し、講師を手配していくことが重要である。
- 特定の大学に参加者が偏る傾向にあるが、年度当初から話をする機会がある大学には可能な限り話をもっていく。今年も意識したことだが、小学校教員養成課程のある大学を中心に紹介していきたい。